

かりますが、こういう専門家に案内していただくと、貴重書が展示してある図書館とか、寺院の中の特別な部屋とか、ふつうは見られないような所を巡ることができます。本当に勉強になりました。

もちろんモスクワ市内もあちこち散策しました。イズマイロボでは市場にも行きました。当時は経済が混乱して、旧国営店では物不足なのに、ここの屋台はどこも豊富な品揃えで、人も詰め寄せ、活気に満ちていました。大半は食料品や衣料品ですから、買いたいものはないのですが、それでも眺めているだけで楽しかったです。

その中に古い本を売っている屋台がありました。台の上には電話帳みたいに大きな本が何冊か並んでいます。表紙は黒ずんでいて題名も分かりませんが、おそらく数百年前の聖書なんでしょう。表紙につけてある値札を見れば、恐ろしく高価なことがわかります。ちょっと手に取ってみたいと思ったのですが、売り子の男性二人はどちらも目つきが鋭く、なんだか怖かったので、わたしもカミさんも遠くで眺めているだけでした。

しかしグーセワさんは違いました。物怖じすることなく屋台に近づき、手前にある本を開きます。やはり聖書のように、古い活字で印刷されているのが見えました。彼女はプロらしく、表紙や奥付などを確認すると、さらに奥にある本を見せるように要求します。はじめのうちは黙って見ていた売り子たちでしたが、何か不安を覚えたのか、お前は一体何者なのかと問い詰めます。彼女はそれを無視して、さらに別の本を見せるように要求し、手帳を取り出してメモを取っています。雰囲気はどんどん陰悪になるのがわかります。ついに男の一人がグーセワさんの見ている本をボタンと閉じて、もう見せてやらないと脅しました。わたしもカミさんは怖くてたまりませんでした。

しかしグーセワさんは違いました。男たちに向かって厳しい顔で、「あなたたちは自分で何を扱っているのかわかってないのよ」と言い捨てると、颯爽とその場を去りました。そして数メートル離れてから、わたしたちにこんなことを話してくれました。

「あそこにあった本はほとんどがクズみたいなものだけど、一冊だけちょっと珍しいものがあったの。いま図書館の予算がどのくらいあるか確認したから、場合によっては買うことにするわ」

えっ、あの目つきの鋭い男たちのところへ再び行くかもしれないのですか！ いやはや、心底敬服しましたね。

あれから 30 年以上が経ちました。数百年前の聖書が買えるほど稼いではいませんが、古い本と言語には相変わらず興味があります。ひとつの言語を本当に勉強する志を立てるなら、古典語に触れないわけにはいきません。上野の写本展で目を凝らしていた人の中にも、ヨーロッパ世界の言語文化を志している人がいたのでしょうか。

<日ロ交流情報>

鎌倉国際交流フェスティバル (11月10日)

今年も湘南ロシア倶楽部が出店



11月10日、鎌倉大仏(高德院)の境内で鎌倉国際交流フェスティバルが開催されました。鎌倉市内の国際交流団体が活動紹介を兼ねて出店するバザールで、湘南ロシア倶楽部(渡辺雅司理事長)も「ロシア・ミニ骨董市」を出店。各会員が家に眠っているロシアの民芸品や音楽 CD、ロシア語書籍、毛皮帽子やスカーフなどを持ち寄って展示・販売しようということで、JIC もマトリョーシカや絵本、キーホルダーなどの販売で協力しました。

JIC ロシア語留学セミナー (11月23日)

「ロシア語留学の今」をスタッフが報告



「ロシアは今どうなっていますか?」「クレジットカードは使えないんですね?」「ロシア以外にも語学留学できる国は?」…こんな疑問に答えるために、JIC では 11 月 23 日にロシア語留学セミナーを開催しました。参加者は東京の会議室とオンラインを合わせて約 30 名。留学手配と現地ケアにあたっている JIC スタッフが、それぞれ一番ホットな「ロシア語留学の今」を報告しました。(セミナーの詳細は、1 月 15 日発行の本紙第 233 号に掲載します)。

シベリア抑留記録・文化賞贈呈式 (11 月 24 日) 石村博子著『脱露』と合作映画『阿彦 哲郎物語』『ちっちゃいサムライ』が受賞

シベリア抑留者記録・支援センターが毎年シベリア抑留の記録や表現などに関わる分野で功績のあった方に贈る「シベリア抑留記録・文化賞」の授賞式が、11 月 24 日、東京・千代田区で開催されました。第 10 回目の 2024 年度受賞作品は、本紙第 231 号でも紹介した石村博子著『脱露—シベリア民間人抑留、凍土からの帰還』(KADOKAWA、24 年 7 月刊)と、カザフ・日本合作映画『阿彦哲郎物語—戦争の囚われ人』およびカザフ・キルギス・日本合作映画『ちっちゃいサムライ—三浦正雄の子供時代』(いずれも佐野伸寿監督)。また、企画奨励賞は静岡を中心に演奏活動をしている窪田由佳子さん(ピアニスト・『シベリアのヴァイオリン』の著者)とその友人・支援者に贈られました。

当日は、贈呈式と同時に窪田さんのピアノ演奏、『阿彦哲郎物語』の上映会が行なわれました。



日本・ロシア協会の講演会 (12 月 4 日) 「ウクライナ戦争を読み直す」

12 月 4 日、NPO 法人日本・ロシア協会(高村正彦会長)の連続講演会が東京・千代田区の衆議院第 1 議員会館の会議室で開かれました。講師は、10 月 9 日の 1 回目につき下斗米伸夫・法政大学名誉教授。ロシアとウクライナの歴史的関係、欧米諸国とロシアとの協調・対立の歴史などを踏まえつつ、アメリカ大統領選挙でのトランプ氏の勝利を受けて、ウクライナ戦争と停戦・和平交渉の今後の見通しが話されました。

講演後の質疑応答でも活発な議論が飛び交いました。外交が国益の追及と妥協の綱渡りであるとすれば、ロシアとウクライナの「双方にとって、勝利と言えないまでも負けではない」結果を実現することは、トランプ氏が言うように簡単に「1 日で行ける」ものではないことが、思い知らされます。

ロシア大使館、大阪総領事館でコンサート 天野加代子とロシアの素晴らしい仲間たち

ロシアから定期的に音楽アーティストを招へいして精力的にコンサート活動を行っている天野加代子さん(メゾ・ソプラノ)が、第 14 回目の「天野加代子とロシアの素晴らしい仲間たち」コンサートを、12 月上旬に東京と大阪で開催しました。テノール歌手アレクセイ・コサレフさん(ロシア国立ゲリコンオペラ等のソリスト)、バレリーナ佐々木美緒さんとともに、東京のロシア大使館(12 月 4 日)、在大阪ロシア総領事館(12 月 7 日)で、オペラ「カルメン」やバレエ「白鳥の湖」など、美しい歌声とダンス・パフォーマンスを披露しました。

コンサートはロシア文化フェスティバル 2024 IN JAPAN のプログラムの一環で、演奏後にはロシア料理の軽食とドリンクのレセプションが用意されており、参加者の交流と懇談の場となりました。



(上)12 月 7 日大阪・総領事館、(下)12 月 4 日東京・大使館

日ロ交流協会の講演会 (12 月 14 日) ソ連を伝えたモスクワ放送の日本人

『MOCT—ソ連を伝えたモスクワ放送の日本人』(集英社刊)で 2023 年開高健ノンフィクション賞を受賞した青島頭氏(毎日新聞記者)を講師に、NPO 日ロ交流協会(服部文男会長)の講演会が 12 月 14 日、東京・中央区の会議室で行われました。

『鉄のカーテン』で隔てられたソビエト国営放送のプロパ

ガンダ (政治宣伝) の一翼を担いつつ、それでもソ連社会のリアルな現実と人々の生活を丁寧に伝えることで、日本とソ連・ロシアの橋渡し (MOCT) になるべく努力を続けた人々の物語は、参加者の深い感銘を呼びました。

大阪日ロ協会が忘年会 (12 月 19 日)

「ロシア料理を食べる会」



大阪日ロ協会 (藤本和貴夫理事長) の忘年会が、「ロシア料理を食べる会」と題して、12 月 19 日に大阪・梅田のロシア料理店「MOCKBA+7」(モスクヴァ プリュス セミ) で賑やかに開催されました。ウクライナ戦争でロシア交流がきわめてやりにくくなった中でも、大阪日ロ協会はロシア現地の事情を知るための講演会を開催するなど、活発に活動を行っていますが、今回は「胃袋でロシアを知ろう」と会員に呼びかけたものです。20 数名の参加者は、ボルシチやピロシキ、ロールキャベツなど、おいしいロシア料理に舌鼓を打ちつつ、来年はロシア料理講習会や新しい趣向の交流活動にも取り組もうと、話が盛り上がっていました。

ロシア語映画発掘上映会 (12 月 28 日、1 月 12 日)

年末年始、意欲的に連続開催

第 11 回と第 12 回のロシア語映画発掘上映会 (主催 ; エース・スクエア 守屋愛代表) が、この年末年始に東京・港区の札ノ辻スクエアで連続開催されました。

12 月 28 日に上映されたのは「チャロデー—魔法使いたち」(1982 年、オデッサ映画スタジオ)、1 月 12 日は「ユノナ号とアヴォシ号」(1983 年レンコム劇場公開収録版) でした。

いずれも守屋愛さんによるわかりやすい日本語字幕がつき、また上映後は梶山祐治さん (ウズベキスタン公立世界経済外交大学講師)、沼野恭子さん (東京外国語大学名誉教授) のミニ・レクチャーがあって、観客の映画理解が深まるよう工夫がこらされています。

このところ約 120 席の会場は常に満席で、ロシア語映画発掘上映会は映画好きのロシア関係者の間ですっかり定着したようです。次の上映会が楽しみです。

第 32 回創価大学ロシア語スピーチコンテスト

スタンダード部門優勝者に JIC から賞品

岡本 健裕 (JIC 大阪)

2024 年 12 月 7 日 (土) に創価大学で開催されたロシア語スピーチコンテストに、協賛企業として出席してきました。私たち JIC は長年このコンテストに賞品を提供しています。今回の賞品は前回と同じく、サンクトペテルブルグの語学学校デルジャーヴィン・インスティトゥートでのロシア語オンライン研修 8 日間 (16 レッスン) です。

出場者は全 20 名で、内訳はエレメンタリー部門 12 名、スタンダード部門 4 名、スタンダード・ビデオ部門 4 名。当日キャンセルもなく、盛況でした。

各部門とも 3 位まで表彰され、さらにスタンダード部門とスタンダード・ビデオ部門にはそれぞれ特別賞も授与されます。つまり、エレメンタリー部門以外の参加者は全員何らかの賞を獲れることが明らかな状況で開催されました。前回からこの傾向が続いていますが、協賛企業としては、スタンダード部門の出場者層にももう少し厚みがほしいと感じます。

<エレメンタリー部門>

12 名のうち、高校生も 3 名いるなど、意欲的な人が集まっていました。かつてエレメンタリー部門は、参加者がオリジナルのスピーチを用意して暗唱する形式でしたが、新型コロナ禍が明けて以降は、全員、主催者が用意した同じ課題文を暗唱する形式になっています。

全体の印象として、練習不足だったのか、緊張で記憶が飛んでしまったのか、時間内に暗唱を終えられない人が数名おり、ちらりと手元の紙を見ながらなんとか終了していたのが、これまでになくゆるいと感じました。かつては、カンニングペーパーの使用は許容されていなかったのではないかしら。

とはいえ、これは悪いことばかりではないと思います。むしろ参加のハードルが下がり、このように盛況になっているのですから、これからもこの戦略でよさそうです。

エレメンタリー部門の 1 位は創価大学の吉田結 (よしだ・ゆい) さんでした。暗唱が完璧だったのはもちろんのこと、質疑応答への的確な回答が印象的で、間違いなくこの方は入賞するだろうとすぐにわかりました。

2 位は上智大学の山本彩香 (やまもと・あやか) さん。特に質疑応答がすばらしく、当意即妙さが誰よりも抜きん出ていました。3 位になった関東国際高校の太田都喜 (おおた・とき) さんは、上位 2 名に迫る実力で、高校生とは思えないすばらしいパフォーマンスでした。

賞は逃しましたが、印象に残ったのが早稲田大学の濱田圭一朗（はまだ・けいいちろう）さんです。濱田さんは、発音、抑揚ともほれぼれするような見事な仕上がりで、すぐにでもロシア語演劇の役者になれるような表現力でした。ところがその濱田さんが意外にも質疑応答ではかなり苦戦、やさしめの質問にも立ち往生気味になったのです。なるほど、これこそがエレメンタリー部門で、それゆえに面白いのだと痛感しました。しかし濱田さんはこれを糧にこれからきっと活躍されると思います。エレメンタリー部門に出場したすべての方の勇気を心から讃えます。

<スタンダード部門>

スタンダード部門は、出場者がオリジナルのスピーチを用意し、制限時間内に暗唱したのち、質疑応答をするという伝統的なスタイルです。

まず全体の印象として、出場者の準備不足が目立ちました。制限時間内にスピーチを終えることができず、省略したり、途中で断念したりした人が複数いたのです。中には、相当なめらかに暗唱しないと制限時間に収めるのが難しい分量のスピーチを用意した人もいて、やはり途中までしか暗唱することができませんでした。コロナ前までのコンテストでは、ここまで大胆な準備不足は見られなかったように思います。パンデミックと戦争で留学経験者が途絶えてしまい、スタンダード部門の層が薄くなっているのを感じました。

スタンダード部門 1 位は、社会人の角南順哉（すなみ・じゅんや）さんでした。角南さんはこのスピーチコンテストの常連です。今回は 4 回目の挑戦で、とうとう 1 位を手にする事ができました。部門出場者 4 人中、唯一、時間内にミスなくスピーチを暗唱できただけでなく、質疑応答でも会場を盛り上げるなど、入念な準備が実ったパフォーマンスでした。

スタンダード部門の 2 位は上智大の高橋由風（たかはし・ゆな）さん。同 3 位は上智大の伊藤萌（いとう・もえぎ）さん。特別賞は創価大の室岡広基（むろおか・こうき）さんでした。

<スタンダード・ビデオ部門>

ビデオ部門はコロナ禍の終息後に新設された部門です。出場者は、あらかじめ録画したオリジナルのスピーチ動画を提出しており、また、審査も先に終わっています。この部門はなによりも、遠隔地からの参加に門戸を開いたという点で、挑戦者層の拡大に大きく寄与しています。

一方で、撮り直しがきいて質疑応答もないという性質上、ビデオ部門ではどうしても本番の緊張感が失われてしまうのはやむを得ません。その代わりに安心して聴けて、内容が頭によく入ってきました。

スタンダード・ビデオ部門 1 位は大阪大学の徳重文弥（とくしげ・ふみや）さん。2 位は大阪大学の小笠原爽夏（おがさわら・さやか）さん。3 位は創価大学の柳井正勝（やない・まさかつ）さん。特別賞はアメリカ創価大学の宮原柚香（みや



↑スタンダード部門優勝者の角南順哉さん



やはら・ゆか）さんでした。

皆さん本当によく準備しており、私からは 4 人とも甲乙つけがたい印象でした。

<講評>

コンテストの講評では、これまでずっとこのコンテストを見守ってこられた創価大学の寒河江光徳先生が、具体的な例を挙げながら的確なアドバイスをされました。

残念ながら、常連の審査員である中澤英彦先生は今回不在で、会場の多くの人が中澤先生の温かくて鋭い言葉を聞けないことをさびしがっていました。

<交流会>

コンテスト終了後、創価大学ロシアセンターの部屋にて交流会が開かれました。お茶やお菓子をつまみながら歓談する自由な雰囲気での会です。提供されたお菓子は、最近ロシアへ渡航された江口満先生のお土産で、貴重な本物のロシアのコンフェートカでした。

若干のアピールの時間をいただいたので、改めて JIC の紹介をしました。以前の賞品はオンラインロシア語レッスンではなく、モスクワ往復航空券を贈呈していたこと、コロナ禍と戦争でロシアへの留学者が何年も途絶えていることへの懸念を伝えました。

いろいろな障害はあっても、今のロシアを見てきた人が将来、専門家として必要とされる時代がきっと来ます。だから皆さんにはぜひロシアへ行ってもらいたいです。

JIC は志ある人、勇気ある人を応援し続けます！

本の紹介

『紅の笑み・七人の死刑囚』



レオニード・アンドレーエフ著

徳弘康好 訳

未知谷 (2024 年)

定価 2600 円+税

恥を忍んで白状すると、アンドレーエフという作家のことは知らなかった。だから 1 度も読んだことがなかった。『紅の笑み・七人の死刑囚』は、そのアンドレーエフの短編が 2 作品収められた新書である。

1 つめの収録作、「紅の笑み」は 1904 年の作品で、すぐに二葉亭四迷が 1908 年に「血笑記」として訳した。なんとそれ以来、新訳は出ていなかったのである。だからきっと読んだことがない人のほうが多いだろう。(そうだとすると私が作家そのものを知らなかったことの言い訳にはなるまい。)

「紅の笑み」は戦争を題材にした、恐ろしい物語だ。人間が肉体的にも精神的にも損壊していく様子が執拗に描写されている。それも主観的に。読者は否応なしに、語り手と同じ視点で一緒にそれを見、聞き、味わい、そして一緒に壊れてしまう…場合もあるだろう。軽率に読むのは危険なのだ。

作品は日露戦争を題材にしているらしい。らしいというのは、作中では一切触れられていないからだ。それどころか地名、人名を示す固有名称自体がほぼ排除されている。距離の単位が露里だったり、お茶を飲むときにサモワールが出てきたりするので、辛うじて舞台がロシアだと推測できるものの、どこの戦場で、誰が誰と戦っているのかは、まったくあまいに描かれている。

だから、この物語は普遍的で、匿名的で、新しくも古くもない。例えば、都市部への無差別攻撃で非戦闘民が大量に殺戮されるような戦争が起きるのはこの作品の数十年後で、もちろんそのような情景は作中に出てこないのに、なぜかそれが描写されているような錯覚すら起こす。かと思えば、まさに今、地球のどこかで起っていることを書きましたと言われても違和感がない。

アンドレーエフはやったこともないのになぜこんなものが書けるのだろう。読者はなぜ没入できるのだろう。それはたぶん我々が、太古からそういう残酷なことをやってきた者た

ちの子孫だからだ。人類が遺伝子に刻み込んでいる殺し合いの経験を想起させるのだ。

良質のホラーである。

「七人の死刑囚」は、それぞれに罪を犯し、死刑判決を受けた死刑囚たちの心理描写からなる群像劇だ。邦訳は過去にも出ているが、古書になっている。だから本作も、読んだことのある人はさほど多くないだろう。

本作のテーマは、自分の命がいつ終わるかを正確に知ってしまった人はどうなるのか、である。「七人の死刑囚」はそれを 8 パターン描き出している。七人の死刑囚なのに 8 パターンとはいかに？それはぜひ作品を読んでいただきたい。

8 つのパターンはそれぞれに全然違っているが、そのどれもが、いつの間にか手にいやな汗をかくような、不快な緊張感に読者を引きずり込む。

死刑囚の記憶は、人類が太古から遺伝子に刻むほどの普遍的な体験ではない。戦争とは違うのだ。しかも今日まで、全ての死刑が、必ずしもその執行日をあらかじめ囚人に教えていたわけでもない。自分の命がいつ終わるかを正確に知るという体験は、特殊中の特殊であって、ごく限られた人しか知らないのだ。そしてそのほとんどは語られずに消えた。

だからアンドレーエフはこれを想像で書いたのだ。作家とはそういう仕事だとわかっているが、それでも思ってしまう。どうしてこんなものが書けるのだろう。

本作を読んでいると、自分が 9 パターン目になった場合にどうなるかを自然と考えてしまう。そして、何も思い浮かばないことに戦慄する。

作品そのものがすぐれたホラーなのはもちろんだが、私はアンドレーエフそのものが恐ろしい。

<訳者について> 本書を上梓された徳弘康好さんは、10 年ほど前に JIC でアルバイトをされていたかつての同僚です。今回の労作に心から敬意を表するとともに、このような才能豊かな方と、ひとときでも一緒に仕事をしていたことを誇りに思います。
岡本健裕 (JIC 大阪)

◆◆編集後記◆◆

▼本号は、新年恒例のスタッフあいさつを中心に編集しました。ロシア旅行・ロシア語留学・日ロ交流に取り組む JIC スタッフの意欲はまだまだ健在です。▼ウクライナ戦争の終わりはまだ見えません。停戦交渉の 1 日も早い開始を望みますが、仮に停戦合意が成ったとしても、ロシアと米欧諸国との敵対的関係は長く続くと思われます。▼しかしながら、私たちはロシアとも中国とも最も近くに位置する国の住民として、緊張を極力緩和し、新しい国際秩序を建設するために、今できることを積み重ねなければならぬと思います。本年も JIC をよろしくお願ひいたします。(F)